

中房温泉—近世・近代の山岳文化が織りなす場所

信州大学学術研究院工学系・准教授 梅干野成央

「（前略）余は日本アルプスの關門、燕嶽の脚下なる、有明山背の高原に位せる、中房温泉の營業者にして、祖先以來是等の高岳と密邇の關係あるもの、山靈の意を奉承して、登山者驩待の方法を劃策すべきの責あるを自覺し、進んで其任に當り、先づ第一着手として、日本アルプス山系の巡回路を開き、道標を設置し、案内者強力等の賃銀を一定して、不當の貧婪を防遏し、更に山徑の適所に地をトして、雨露を凌ぐに足るべき小屋を建設し、成るべく登山者の冗費を節し、危険の虞を去りて、安泰愉快に深山を跋涉するの便宜を圖らんとす。固より此の如きの大計劃を完成せんことは、微力の不肖一個人の能くし得べきに非ずと雖も、之を濟すに比較的好都合の境遇に在るを利用し、至誠以て是に當らば、他日成功の期あるべきを信じ、本年より着手し、年を逐ひて漸次其企劃を遂行せんとす。

（後略）」この言葉は、中房温泉の6代目經營者の百瀬亥三松が、日本山岳会の機関紙『山岳—第4年第2号』（明治42（1909）年）に「日本アルプス探險者諸君に」と題して寄せた言葉の一節である。

中房温泉の開湯は、文政4（1821）年。松本藩の命により、百瀬茂八郎がこの地に明礬の鉱山を開いた際、湧出する温泉を利用して山中に湯屋を設置したのが始まりであると伝えられている。中房温泉の施設のなかほどに遺存する田村薬師堂（江戸末期建設・国登録有形文化財）や山の神の社（江戸末期建設・国登録有形文化財）は、こうした時代の物証であり、生業とともに信仰とも結びついた近世の山岳文化をよく伝えている。田村薬師堂は温泉の起源に関わる伝説にまつわる宝形造りの小堂であり、山の神の社は陰刻が施された巨岩の上に鎮座する一間社流造りの小社である。他にも、近世の中房温泉の様子を伝える遺構として、土蔵（嘉永7（1854）年建設・国登録有形文化財）や板倉（江戸末期建設・国登録有形文化財）がのこる。

明治時代になり近代登山が普及すると、前近代の中房温泉を基盤としながら、登山基地として大きく発展していく。冒頭で取り上げた百瀬亥三松の言葉は、おそらくその出発点としての意思表示でもあったのだろう。登山基地として栄えた中房温泉には、多くの著名な登山家が訪れた。大正元年（1912）には、日本近代登山の父、ウォルター・ウェストンも訪れており、その著書『日本アルプス再訪』のなかで中房温泉の魅力を記し、「将来、日本の知られざる地域の中の、最も魅力的な場所の一つに、きっとなるに違いない」と絶賛している。この時にウ

エストンが宿泊した施設が本館菊（明治中期建設・国登録有形文化財）である。本館菊は、宿泊施設の好例として、また、ウェストンが山行のなかで利用した宿泊施設の遺構として、近代登山の歴史と結びついた近代の山岳文化をよく伝えている。本館菊に隣接してたつ旧湯会所（明治中期建設・国登録有形文化財）も、石置き板葺きの屋根をのこすなど、歴史的な景観を伝えている。

また、中房温泉は、日本で最初期に行われた林間学校の現場としても知られている。松本出身の教育者で、成城中学校の校長をつとめていた澤柳政太郎は、大正6（1917）年に林間学校の設置を決め、中房温泉をその地に選んだ。その翌年には第一回目の林間学校が開かれ、大正10年には校舎が完成した。当時の中房温泉は、すでに登山基地としてだけではなく、温泉大プール（大正期建設・国登録有形文化財）の存在が物語るように、自然環境を活かした保養地としても成長していた。その環境が林間学校としても利用されたのである。ここでの林間学校の経験は『日本アルプスと林間学校』にもまとめられており、林間学校の先駆けを記録した重要な史料となっている。現在も施設のなかにたつむ林間学校の校舎は、往時の様子をうかがい知ることができる文化遺産として貴重である。

では、より高所の山岳へ、視点を変えてみよう。当代（9代目）経営者の百瀬孝仁氏が所蔵する史料を紐解いた結果、7代目経営者の百瀬彦一郎の時代、大正期に15ヶ所へ山小屋の建設を計画していたことがわかった。このうちの3ヶ所は中房温泉までの登山道に、残りの12ヶ所の多くは中房温泉から槍ヶ岳へ至る登山道に計画されていた。そのうちの幾つが実現したかは定かでないが、他の史料の解釈も含めれば、このうちの8ヶ所については計画が実現したことを確認した。今も経営が続く殺生ヒュッテ（大正11（1922）年開設。現在の建物は昭和34（1959）年建設）とヒュッテ西岳（大正14（1925）年開設。現在の建物は昭和40（1965）年建設）は、こうした歴史を伝える文化遺産なのである。

百瀬彦一郎は、山小屋の計画だけでなく、これに先立って登山道の開鑿にもあたっていた。『山岳—第13年第1号』（大正7（1918）年）には、百瀬彦一郎が記した「中房温泉より」のなかで、中房温泉を中心に、中房から燕岳、大天井、常念岳、ニノ股、槍沢を経て上高地に至る縦走路、これをアルプス巡回路と命名し、整備したことを報告している。また、『山岳—第15年第3号』（大正10（1921）年）には「槍ヶ岳新登山路」と題された信濃毎日新聞の記事が転載されており、百瀬彦一郎らが大天井から槍ヶ岳へ通ずる近道が整備したことが記録されている。前者は、槍ヶ岳や穂高連峰を中心とした登山におけるもう一つの拠点である上高地との接続を目指したもので、後者はその拡充を目指したものであったら

う。

百瀬彦一郎によって進められた山小屋の建設と、これに先立って行われた登山道の開鑿、これらは冒頭で取り上げた百瀬玄三松の言葉と重なる。玄三松から彦一郎へと受け継がれた二代にわたる想いが実現したもの、として捉えることができるだろう。さらに言えば、これと前後して整えられた鉄道の敷設も、おそらくはこうした事業と関係していたのだろう。信濃鉄道の創設者の一人に百瀬玄三松が名を連ねていることふまれば、鉄道によって山岳と都市とが直結した壮大な登山の構想、こうした登山を含めた観光にもとづく近代的な構想が全体の背景にあった可能性は高い。

山岳では、その厳しい自然環境から、場所に対するより専門的な知識が求められる。そのため、先に紹介した登山道の開鑿や山小屋の建設に関する計画を、百瀬彦一郎が直接的に進めたとは考えにくい。山岳は古くから生業の場であり、中房温泉もこうした生業の場の一つであった。中房温泉において、近世から続く山岳を生業とする人々（猟師や樵夫など）との結びつきは近代に入っても引き継がれ、こうした人々に蓄えられた山岳に関する経験的知識を参照しながら、また、それを総合しながら計画が進められていったのであろう。近世から続く山岳に関する経験的知識と近代的な構想との融合、その結果として実現した遺構が今も中房温泉とそこから続く登山の道筋には伝えられているのである。

プロフィール

梅干野 成央（ほやの しげお）

信州大学学術研究院（工学系）・准教授

日本建築史学が専門。フィールドワークにもとづいて歴史的建造物の保存・再生に取り組む。伝統民家や近代建築などの歴史に関する研究の他、日本アルプスや富士山など山岳域にたつ山小屋を対象として、山岳建築に関する研究を進めている。

